

あの日この日

映画文学人生論

尾崎一雄 (1902-8)

『あの日この日』 (1975) 「講談社」

『続あの日この日』 (1982) 「講談社」

『暢気眼鏡』 (1937) 「砂子屋書房」

『虫のいろいろ』 (1949) 「留女書店」

俺は、たった今考へついたらんだが、生存五ヶ年計画といふのをたてる

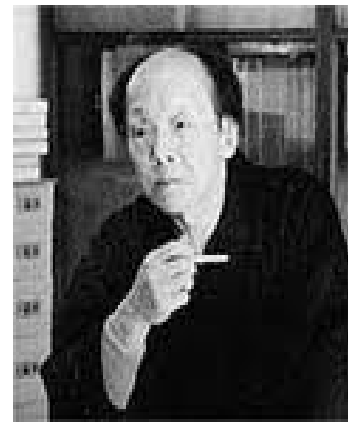
回想録『あの日この日』によれば、尾崎一雄は昭和十九年八月末に胃潰瘍の大出血で昏倒。家族とともに郷里の小田原市下曾我に帰った。

その翌年、戦争は終わったが、老母と妻と子供三人を抱へ、無収入で難儀する。とりあえず、何よりも生きることだ。「俺は、たった今考へついたらんだが、生存五ヶ年計画といふのをたてる」と妻に宣言した。うまく五年生きたら、つづいて第二次五ヶ年計画に入る。きみもそのつもりでやってくれ。「当たり前ですよ」と妻は応じた。

しかし、筆が遅い上に、病人なので、仕事ははかばしく進まない。昭和二十二年の実績は、短編『落梅』三十四枚と短編『虫のいろいろ』二十四枚の二篇だけである。

その年の二月二十四日の夕方、思いがけない訪問者があった。太宰治だ。見知らぬ婦人と一緒だが、妻はその婦人、太田静子と知り合っていた。戦争末期、一緒に勤労奉仕をしていたのだ。『斜陽』と『暢気眼鏡』のヒロインと一緒に勤労奉仕をしていたのだ。事實は小説をより面白くする、その後、来訪者が急に増えたのは、「尾崎一雄はもう長いことは無い。見舞に行くのなら今のうちだ」などと太宰がいいふらしたからでもある。しかし、四ヶ月後に死んだのは太宰のほうだ。

一方、尾崎一雄は、一日の大半を横になって寝



あの日この日

映画文学人生論

たきりの状態で、蜘蛛や蚤や蜂や蠅などいろいろな虫を観察したりして毎日を過ごした。

レコードの、「チゴイネルワイゼン」が鳴りだすと、蜘蛛が長い足を一本一本ゆっくりと動かして、壁面を歩きまわり、曲が終わると、卒然と静止し、姿を消したことがある。

何かのことで空瓶（あきびん）を一本取り出して、何げなくセンをとると、中から一匹の蜘蛛が走り出て、物陰に消えたこともある。半年間、閉じ込められ、凝（じつ）と待っていて、機会が来ると、間髪を容（い）れず逃げ出したのだ。

蚤に曲芸を仕込む大夫の話によれば、蚤をつかまえて、小さな丸いガラス玉に入れると、蚤は脚で跳ねまわる。散々跳ねた末、もしかしたら跳ねるといふことは間違っていたのじゃないかと思いはじめめる。ムダだと自覚してしまおうと、どんなことがあっても跳躍しなくなるので、そこで初めて芸を仕込むという。

また、何とかいう蜂の翅（はね）は、体重に比較して、飛ぶ力を持っていない。力学的に飛行が不可能なのだが、実際には平気で飛んでいる。自分が飛べないことを知らないから飛べるという。こうして、尾崎一雄は身近の虫を観察して、宇宙や神の存在まで思考をひろげながら、生存五ヶ年計画を何度も更新し、八十三歳まで生きた。

木枯らしや一本の道はるかにて 尾崎一雄